

星空にオリオン座が輝いている。

長方形のまん中を三連星で絞った、蝶のような、砂時計の形のような星座だ。三連星を左下へ辿ると、ひととき光る、蒼白いシリウスが見える。

満天の星空だった。ちようど希が空を見上げたとき、三連星の陰から、すつと星がひとつ流れた。吉兆のよう、余計に嬉しい心地になった。

真夜中のあぜ道を、希は歩いてきた。となりにランタンを持った男が一人、後ろに二人。草の生えた道のまん中を挟んで、轡の中を二列になる。刈り取られた稲の根がデッキブラシのように何列にも並んでいる。田を、霜のような月光が照らしていた。冬の泥と枯れ草のにおいが夜気に湿って満ちている。両脇から伸びる枯れ茅に半長靴がふれて、ガサツと音を立てた。温暖な九州もすっかり冬の気配だ。

ランタンに火は灯されていないが、いい月夜だ。草の根元まで明るい。足取りは余計に揚々とした。

誰もが無言だった。後ろの男の片方は、母のもらい泣きをしてまだ涙をすすっている。

上気しそうな頬に、夜露を含んだ冷たい空気が心地いい。唇から零れて白く後ろに流れてゆく吐息に頬を撫でられているようだった。

夜道を歩くことでも楽しい。子どもの頃は、果てしなく夜が続くような、夜明けが来たら世界が終わってしまうような、あてもない想像を真実のように信じていた。そして今は、この夜がずっと続くことを希は知っ

ている。

国民服の上着だけでは寒い夜で、中にもう一枚着込んでくればよかったかと思つたが、みんなの足を止めてまでわざわざ服を取り出すほどの距離ではない。それより早く到着したかった。逸る歩調を抑えるのに苦労した。早くあの人の側に行きたい。

俯いてぎくぎく歩いているとなんだか笑い出してしまいで、希は唇を結んでまた夜空を仰いだ。満天の星で、カシオペア座が白墨でWの線を引いたように、はつきりと見える。唇を結んでいるつもりだったのに、呼吸と堪えきれない笑みでほどけて、小さな笑い声になった。

「……」

外套を着た、鏝のある帽子を被ったとなりの男が気味悪そうに希を見る。後ろの二人がひそひそと声を交わすのも聞こえてきた。マズイと思つて希は顔を引き締めようと思つたが、やっぱり無理だと思つてやめた。にやける口許を手で覆い、それでも隠しきれずに俯いて笑うと「ふ」と声が出た。

浮かれていると自分でも思う。嫁入り道中のようににも思えるのだから、本当にどうにかしてしまつたのかもしれない。

風のない冬の夜は凍つたようにしんとしている。自分たちが立てる音だけが乱雑に響くのが、また希の笑いを誘う。

若宮の杜の前を通り過ぎ、石橋の架かった涸れた用水路を渡ると、明るい星空に山のように大きな屋敷の影が見えはじめた。

手にしていたトンボ玉を握りしめると、また自然に頬がゆるむ。駆け出したくなって、自然に背筋が伸びる。そんな自分をとりの男は、気味悪そうに横目でチラチラ見るだけになった。

きつと葬列のようになると予想してきたのだから彼らにとつて、飛び跳ねるのを必死で堪えている自分の浮かれ具合は確かに不気味だろう。恐怖や絶望が大きすぎて、頭がどうかしたのではないかと思われているかもしれない。

よく考えたと確かにおかしい。そう思うとまた笑いが込みあげそうだった。

自分は今から死にゆくのだ。

十 十 十

昭和十九年、十一月。

盧溝橋事件から七年、大東亜戦争の開始が宣言された真珠湾攻撃から三年。

緒戦こそ大進撃を重ねた日本だが、今年になって戦況ははかばかしくなっていた。最近はこの九州の田舎でも、物資の不足が囁かれ、勇ましいのはラジオの声ばかりとなっている。

夕刻になれば電球に笠を垂れて息を潜める生活だ。まして真夜中では家の灯りはどこにも見えない。梢の間から星が覗いている。犬の遠吠えが聞こえていた。

成重家の門前に到着した希たちは、正面の門をくぐらず、堀のある白塀に沿って右に回った。

二十三時に到着予定だったが、二十分ほど早く着いた。裏門は開けっぱなしになっている。希が門をくぐると一番最後に門を通った男が首を殺して門を閉めた。

向こうを見ると屋敷の果てに神社のような広い庭と、夜空を覆う巨大な樗が見える。眺めていると「こつちへ」と灯りが点つていない裏玄関の中へ入れと手招きされた。

一行の中の若い男が玄関に入ってきて、玄関で待つていた白髪の男に声をかける。

「ただいま。旦那さんは」

「お部屋でお待ちやわ。その方？」

希を見ながら老人が訊いた。

「よろしくお願いします。……希といいます」

頭を下げるとき、『琴平』と名乗るべきかどうか迷ったが、夜が明ければ『成重』という名字になる身の上だ。少し悩んで名前だけを名乗り、希は玄関に立つたまま深々と頭を下げた。

希のとなりを歩いてきた若い方が林、玄関で待つていた年寄りのほうが加藤と名乗った。

林に案内されて廊下を歩き、台所や納戸の横を通って明るい方へと進む。成重家には他の家同様、多くの軍人が下宿していたから、彼らと会わないように慎重に気配を窺いながら奥の間に向かう。

「旦那さん、琴平さんが到着しました」

林は奥の間の襖に声をかけた。返事を待つて襖を開ける。室内に入って襖の前に座る林のとなりに、希も膝を落とした。

部屋の奥に、着物に身を包んだ男性が、脇息に寄りかかって座っている。鼻髭を蓄えた威厳のある容貌で、胸の下に段ができるほど恰幅がいい。ぎよろりとした目、長く伸びた眉がいかにも身分がありそうな印象の男だった。

これが成重家の当主、成重徳紀という男だ。海軍中佐で大蔵省に勤めている。三年前のマレー沖海戦で活躍し、凱旋後は内地で執政に関与していると聞いていた。地元の大地主であり政治家でもある。郷土の誉れと名高い男だ。

希は居住まいを正し、畳の縁の手前に手をつけて、深く頭を下げた。

「琴平希、十八歳です。筑波空で中練を終え、先月大分に帰ってきました」

戦闘機に乗る新人航空隊員として、希が大分県の基地に配属されたのは二ヶ月前のことだ。

中学を繰り上げ卒業後、飛行予科練習生を志願し、霞ヶ浦で初練、筑波で中練を終え、飛行要員として最終練を積むべく大分県の航空隊に配属となった。たまたま希の生まれ故郷だったのは僥倖だった。

徳紀と面と向き合うのは初めてだが、徳紀は先日、希を見ている。話が纏まったあと、視察に来るという名目で航空隊基地にやってきた。遠目に希を眺めて容貌などを確認し、この役目に相応しいと認めてくれたというこころらしい。

あぐらをかいた徳紀は、重厚な外見と温厚そうな雰囲気を持つ男だ。

「道中ご苦労だった。父上はお達者かな。兄上たちも」

「はい。父は相変わらず天文台詰めです。次兄も父の側におります。長兄は農地指導で今は兵庫におるそうです。三男はラバウルです」

父は天文学者で東京の大学に勤務している。次男は父の助手として働き、長男は農業学者で、効率のいい農業を指導するために日本中を転々としていた。すぐ上の兄は南方に出征していて『航空隊の華』と呼ばれるラバウル航空隊で気を吐いているらしい。

じっと希を見つめていた徳紀は、「希くん」と改まった声で言った。

「今日から僕を父と思ひ、この家を自宅とも思つて過ごしてくればありがたい。ご実家にはくれぐれも手厚くすると重ねて約束をしよう」